

---

日付屋 あした、たいようののぼるあしたに

千草ゆう来

---

## 注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日付屋 あした、たいようののぼるあしたに

### 【Zコード】

N9671A

### 【作者名】

千草ゆう来

### 【あらすじ】

「日付」のない国で、青年と少女は出会った。恋人ジェイドとの  
約束のために、「日付」が欲しい青年ウイル。「日付」を売る少女  
ダイア。出会いは何かを変えるだらうか？

## 第一話（前書き）

全年齢対象ですが、同性愛を含みます。

## 第一話

世界の果てのあるいは真ん中か、それとも微妙に南東とかそんな方角かもしれない、とりあえず島国でもなく海辺でもない、大陸のどこにある国で。

いくらか前に、 ウィルは生まれた。

ウィルは名前。 名字はない。

昔、まだウィルの父が幼かつたころにあつた戦争の前まではあつたようだが、今では政府のえらい役人か貴族しか、名字を名乗ることはできなくなつた。

母は「本当はメイにしようつて言つてたのよ。でも女の子の名前みたいでしょ」と得意そうに笑つた。どうやら父の案だつたらしいが、詳しいことは知らない。父は、妹のメイが生まれたのとほぼ時を同じくして亡くなつた。ウィルはようやく言葉を話せるようになつたばかりだつた。

ウィルは今、だいたい大人である。

だいたいというのは、まだ妻も子どももないが、一人前に塗装屋としての仕事をしているからだ。同じ塗装屋にはジェイドという幼なじみがいて、ジェイドはウィルが生まれるより少し前に生まれたらしいが、彼もまだいたい大人だ。

大人としての区切りは、婚姻と決まつてている。だから、まだウィルはいちおう大人ではない。

なぜそんなややこしいことになつているかといふと、この国には「日付」がないからだ。

日付が欲しいとき、たとえば誰かが生まれたときや死んだとき、結婚するときなどには、役場の近くにある日付屋で日付を買つてくれる。

ウィルはイザルの月の一十一日の生まれだが、それは父が日付を買つてくれたからある誕生日だ。だがいつの季節のいつになつたら

もう一度イザルの月の二十一日が巡つてくるのかをウイルは知らないし、この町のだれも知らないのだ。役場の三階にずっと住んでいる役人と、日付屋の人以外は。

だから、いつになつたら大人になるのかを知る人もいない。でもウイルはそのことに疑問や不安を感じたことはなかつた。イザルの月の二十一日に、両親が生んでくれたウイルという自分がいる、それで十分なのだと思っていた。

\*\*\*

ウイルたちの住む町は、山間にぽっかりとあいた盆地にある。周りを深い森に囲まれているが、ちょうど峠へ向かう旅行者や行商人が最後の休息を取る町として、だいたい年中、それなりに賑わっていた。

町の中心部は盆地のほぼ真ん中に位置し、住宅や店々はそれを取り囲むように成り立つていて。ウイルの実家は中心部から近くも遠くもないあたりにあつたが、勤める塗装屋が町はずれなので、毎日いくらかの時間をかけて歩く。

しかし今日は塗装の仕事で、町の中心部に呼び出されていた。「窓枠がそんな簡単に外れるもんか。どうせガキどもが壊したんだ

ろ」

ウイルの隣で仕事道具が山盛りに載つた荷車を引きながら、ぶつぶつ文句をたれているのは、相棒のジェイドだ。

本来塗装屋の仕事ではない、窓枠の修理という仕事を役人の「似たようなもんだろ」というわがままで引き受けさせられたうえ、修理費を値切ろうとされたので、機嫌が悪いのだ。しかもジェイドは子ども嫌い。

「まあまあ。もう今くらいなら学校に残つてる子どももいないよ

「う結婚適齢期」というやつにそろそろ入るのだろうが、いまだに子ども嫌いだ。

「そうである」と願うぜ

ジョイドは肩をすくめて、また前を見据えた。

「 ウィルはそんなジョイドを斜め後ろからすこし見上げながら、ふと笑みをこぼす。

おやじさんは若いウィルたちふたりだけで仕事を出すのをためらつたようだが、ウィルにしてみれば振って沸いた幸運だ。ふだん、気さくな先輩たちに囲まれながら仕事をするのも楽しいが、ジョイドとふたりで歩くのはまたちがう。

今日じゃなきゃいやだ！と駄々をこねた、服屋のおかみさんに礼を言いたい気分だ。おかみさんの我慢のせいでの、他の面子はみな服屋の施工にかかりきりになってしまい、あまりおかみさんに重要視されていないウィルとジョイドだけがふたりで出てこれたのだから。

「なんでジョイドは子ども嫌いなんだうなあ

「 ウィルがぽつんと呟くと、ウィルの視線よりも少し高いところにジョイドが唇をとがらせた。

「 しうがねえじやん、なんかある、意味不明な生き物なのがダメなんだよ」

「 あそ。よくジョイド、ほくのこと大丈夫だったね」

ふたりの家は近所で、母親同士も仲がいいはずだから、先に生まっていたジョイドはウィルの世話をしていたはずだったが。

「 自分も子どもだった時はよかつたんだよ」

「 そりやあジョイドにも子ども時代があつたんだよなあ

「 なんだよお前、その田」

「 いいえー別になんでもー？」

ジョイドの子ども時代なんて自分もさうに子どもだったから、少し背の高い彼を見上げて追いかけていたことしか記憶にないが。しかも今もジョイドのほうがいくらか長身だが。

考えれば、今の自分よりも小さい彼だつていたわけで。

うわムカツク、と舌打ちしながら「ポンしてくるジェイドに、腹にパンチをお見舞いすることで反撃しながら、ウィルは小さいジェイドを妄想しながら面白い気分になつっていた。

「お前は妹いるから子ども好きになんのかな」

「どうだろう？ そんなにメイも小さいってわけじゃないけどね」

メイは今年からパン屋の売り子として働いている。

「だよな。メイ、俺たちより先に大人になるだろうしな」

そこのパン屋の次男坊と仲良くやつてているというもつぱらの噂で、しかも長男は首都へ科学者になる勉強をしに行つているから、嫁入りももうすぐじゃないかと近所でささやかれている。

「 ぼくらは一生大人にならないよね、きっと」

きっと、という言葉を付け足してしまつたのは、約束が永遠でないことを既に知つてしまつた大人だから。だがジェイドはすぐに気づいて言った。

「きっと、じゃなく絶対、だけどな」

絶対を言つなら、日付が欲しい。

せめてウィルが生まれ日を教わつたように、日付を買いたい。だがそんなことが、出生でも婚姻でもないのに許されるわけもないのだろう。

徐々に上り始める眩しい日差しに、ふと、今日は何の用の何日なんだろう、と考えてはいけないことを考えてしまい、頭を振つて取り消した。

## 第一話

落としてきた、と気づいたのは、ベッドに寝転がった瞬間だった。風呂屋にも行って頭を洗って、着替えもさせている。もちろん夕食も。硝子などはめることのできない庶民住宅の木窓の向こうは、すでにとっぷり暮れて、真向かいの家の窓から漏れているランタンの明かりがちょうど見える。

たかがタオルひとつだ。

ウィルは深呼吸した。でもあれは、貰いものなのだ、ジェイドからの。この間、ようやく塗装屋のおやじさんに一人前認定された時に、お祝いとしてジェイドが買つてくれたのだ。

まさかそれを、こんなに早く落としてしまっわけにはいかない。ショットチャウ持ち歩いているから、そろそろ汚れてきてはいるが、そのままにしておいて次の日現場に行つたときにジェイドに見つかるのもばつが悪い。なにより、先にほかの誰かに見つかって、汚いタオルだなどとも思われて処分されてしまうのが一番いやだ。ウィルは立ち上がつた。

新しいシャツとズボンを小さなワードローブから取り出して身につける。居間に顔を出したら、ちょうど母は風呂屋へ行つていて、妹のメイがだれから貰つたのか、新聞を読んでいた。

「ちょっと出かけて来るよ」

廊下から声をかけると、メイは顔を上げずに頷いた。

「うん」

文章に夢中になつてゐるときは、何を言われても耳に入つてこないのは、ウィルもそうだから理解できる。どうせすぐ戻るのだし、メモを残さなくても大丈夫だらう。

ウィルはサンダルをつっかけて外へ出た。

やや早足で道を進んでいく。家々からこぼれるわずかな明かりを頼りに、学校の裏手まで、さほど多くを歩かずにたどり着いたが、着いてからはたと気づいた。

ここまで明かりがあつたけど、学校の裏手なんかに明かりがあるわけないじゃないか、家にいた時のぼく！

どこかの家からランタンを借りようかとも思ったが、そんなことをしては、なぜ夜にこんな場所へ来たのか、一から説明しなければならない。タオルひとつを取りに来たと言つても、怪しまれるだけだろう。

途方に暮れて、辺りを見回したところで、

ふと、一軒の家の明かりが目に入った。

学校のすぐそばの家。いや正確には家ではなく、「日付屋」。文字通り日付を売る、政府直営の店だ。店員は常に店の中にいて、めったに表へ出てくることがない。食料などは役場の役人が運び、日付屋自身は一生を店の中で過ごすというのがもっぱらの噂だった。誕生や婚姻、死去の際に日付を買いに行つた大人たちの証言もバラバラで、大人のうつくしい女性だという人もいればやんちゃな少年だという人もあり、女か男かわからない老人だという人もいた。何人かの証言は重なつてているので、日付屋は何人かいるのだろうということになつていたが、ウィルの家とさほど変わらない大きさのこの建物に、住めるのはどうがんばつたとしても、せいぜい四人か五人だろう。そんなバラバラな人物像の人たちが何十人もいると到底思えなかつた。

そんな不得体の知れない、しかし見た目は多少頑丈な柱作りになつてゐるだけのごくふつうの家から、今細い明かりが漏れている。

日付屋は政府の直轄だから、窓には硝子がはまつてゐる。その向こうにはカーテンが引かれてゐるが、わずかな隙間からは明らかにランタンの明かりが漏れていた。

人影がそこに映ることはない。だが、人がいるのは確かだろう。

もう日付屋の営業時間ではないが、民家に明かりを借りるよりは

問題がないように思える。断られたら諦めればいい。

そう自分に言い聞かせて、ウイルは体の向きを変えて田付屋へ向かつた。

ドアをノックする。

田の詰まつた木でできたドアは、男のウイルがこぶしで叩いてようやく音が響くほどの分厚さだ。これも政府直轄だからなのだろうか。

一度に二回、それを三度繰り返したところで、中からノックで返事があつた。

「あのー、もう店終わってるのにすみません、ランタンかろうそくあつたら貸してもらえませんか？」

すこし離れた民家には聞こえない程度に、声を張り上げる。

やや間があつて、もう一度、中からか細いノックが返ってきた。これははどういう意味なのだろう、とウイルが首をかしげた瞬間、ギイと鈍い音を立てて重いドアが開いた。

だれもいない、と一瞬思いかけて、視線を落とすとそこには子どもが立っていた。

少女だった。ウイルよりはもう少いこと、メイよりも小さく、学校に通う子どもたちと同じくらい小さな女の子だ。

このあたりでは珍しい、螺旋状の長い髪をかすかに揺らして、少女はウイルを見上げた。

「……終わり」

少女が指さすので、何のことかと思つたら、戸口の横に『田付屋』という看板があつた。田付屋の営業は終わつたという意味だろうか。「ああ、うん、それは知つてゐんだけど。ちょっと落し物を取りに来たんだけど、灯かりを持つてくるのを忘れてしまつて。貸してもられないかな、と」

少女はじつとウイルを見上げていた。迷つてゐるよつとも見えるし、ウイルの正体を疑つてゐるよつとも見える。頭ふたつぶんくらいの身長差にもめげず、少女は田を泳がせることもなく、ウイルと

向き合つてゐる。

やがて、少女はドアを支えていた手を離し、くるりと回れ右をして奥へ引っ込んでしまつた。

「あ、あの！」

ウィルは慌ててドアを引きとめ、玄関に入る。

生まれて初めて入る日付屋は、営業時間外だからなのか、ほとんど暗くて、ただ正面に、学校の机のよつたなテーブルが置いてあり、椅子が手前に三つ、奥に一つあるのがぼんやりと見えた。ここに座つて、日付を買うのだろうか。

さりにその奥から、明かりが漏れているところを見ると、そちらが日付屋たちの居住空間なのだろう。ほかに何人の日付屋がいるのかはわからなかつたが、話し声が聞こえないところを見ると、仲が悪いのか、もしくは既に眠つてしまつていた後だつたのかもしれない。

起こしてしまつて悪いことしたかなあ、と思つたところに、少女が奥からカーテンをかきわけて現れた。

無言で差し出されたのは、ふだんウィルたち庶民が使うのとせして変わらない大きさ、装丁のランタンだつた。

「ありがとう。すぐ返しに来るよ」

少女はかすかに頷き、また奥へ引っ込んでしまつた。

ランタンのおかげで、玄関付近は明るくなつたが、学校の図書館のように壁に本が並んでいるわけでもなければ、むかし同級生たちと想像したように妖しげな文様が刻まれているわけでもなく、ごくふつうの木造の壁だつた。

すぐに学校に戻り、タオルを探す。ランタンのおかげで早く見つかった。だから、日付屋に返しに来るまでに、さほどかかつていなければずだ。

もう一度ノックをすると、今度はすぐにドアが開いた。

やはり巻き毛の少女が立つてゐた。

「ありがとう。すごく助かつたよ」

ウイルがランタンを差し出しながら軽く頭を下げる。少女はこくんと頷く。

「あのね……ひとつだけ、これとは別に訊きたいことがあるんだけど」

おずおずと言に出すと、少女はわずかに首をかしげて、すっとウイルに向かつて手を伸ばした。慌ててよけると、少女はドアを閉めてカギをかけ、それからウイルを見上げた。

「……あ、うん。あのさ、田付ってどうやって買いうの？」

少女はさも不思議そうに首を傾げる。

「田付って、子どもの誕生か、婚姻か死去のときにしか買えないんだよね。そういうんだけじ田付が欲しいことさせだうしたらいののか、わかる？」

たとえば、男の恋人と約束した日の田付を買うとか。

まさか具体的に言つわけにもいかず、ぽかしたが、少女はそれで理解したのかしないのか、

「買える」

と答えた。

「ん？ それは誕生でも婚姻でも死去でもないときでも、田付を売つてくれるってこと？」

少女は頷いた。

「でも……、ぼくは学校で、その三回しか田付屋は売つてくれないつて習つたんだけど。大丈夫なの？」

再び「ぐづ。

「じゃあ、……その、この次の夜に買いに来てもいい？ キミはいるかな？」

「いる」

「じゃあまた、太陽が沈んで月が出てしばらくしたら来るよ、今ぐらい暗くなつたころに」

少女は同じ調子で頷く。

「ランタンを貸してくれてありがとう。なにかお礼も持つてくるよ。

欲しいものはない？

「……」

「じゃあ、この次の夜までに考えておいて。じゃあね」

椅子を引いて立ち上がり、日付屋を後にする。

少女は手も振らなかつたし、お辞儀もしなかつたが、黙つてドアに消えるウイルを見つめていた。まっすぐな瞳で。

無表情の、静かな少女。

それが、ウイルの初めて見た日付屋の姿だった。

話があるんだ、ヒュイルが改まって言い出したのは、工事の昼休憩のときだつた。

学校側からふたりには、空き教室のひとつを資材置き場と休憩室として提供されていた。その資材も、既にほとんど工事に使用されなくなり、がら空きの教室の真ん中に、ぽつんと椅子と机が四つだけある。体だけは大人の男には小さすぎる机と椅子をふたつ並べて、ふたりは弁当を開いていた。

「何だよ」

「あのさ、ジエイド。ぼくたち、恋人だよね？」

唐突に口にするにはあまりにも直接的な言葉すぎて、声をひそめたものの、思わず視線を外してしまつた。

「……そうだよ？」

気配で、ジエイドが周りを見回したのがわかる。

教室のドアはきつちり閉めているし、校庭がこれほどひるむといのに、聞こえるはずもない。窓の外にだれもいないことだって、ヒュイルはきちんと見ている。

「なんだよお前、恋人できたとか言うんじゃねえだらうな？」

あまりにもありえない答えに、思わず笑つてしまつて、うつむせえと今度はジエイドが頬を染める。

「それはありえないよ。じゃなくて、前の夜に、女の子に会つて」「はあ？」

「夜に、学校に忘れ物を取りに来たんだよ。あの、　　今日の前日、ぼく、上着を忘れて帰つたでしう？」

ジエイドの前で、タオルを忘れたとは言いにくく、ヒュイルはどうさに嘘をついた。これくらいは許される嘘だろう。「知らねえけど。それで、なんで女の子なんだ」

「取りに来たはいいけど、灯かりを忘れてて。どうしよう、でも民家に借りるにも、と思つたら、ふと隣の日付屋が田に入つて」

自然とジョイドの視線が日付屋の方角に向く。

「断られたら諦めればいいか、と思つてノックしたら、女の子が出てきたんだよ。日付屋の。そしてランタンを借りて、タ　じゃなくて上着を拾つて、その帰りに訊いてみたんだ。『誕生と婚姻と死去じやなくとも、日付を買うことはできないの』って」

「マジでそんなこと訊いたのかよ」

「マジだよ。女の子だし日付屋だし、大丈夫だろ?と思つて」

同性愛なんておそらく知らないだろうし、日付屋は町の人たちとの交流をいつさい持たないから、彼女の口からウイルがそんなことを訊いたなんて漏れることはない。

「まあ、大丈夫だろ?けど。んで?」

「売つてくれるって」

「マジでか!」

思わず声の大きくなつたジョイドの口を片手で塞ぐ。

「うん。だからさ、その……、今日の夜、一緒に彼女に会いに行かない?」

「なんでだ?」

「……」

ウイルは思わず口<sup>ノ</sup>もつた。

特に何もできる約束がないぼくたちにも、日付があればひとつ約束として見えるから、日付が欲しいのだと言つたら、ジョイドは笑うだろうか。

でもそれを説明しなければ、今日の夜と一緒に行くことはできな

い。

「……あのさ、ぼくらの記念に、日付を買わない?」

ジョイドがぽかんとした表情になるのを、ウイルはこわいと見つめた。

「だから、……日付って、ひとつ日の日印だから」

ウイルだけでなく、ジョイドにも誕生日がある。ジョイドの両親が買い与えたものだ。ウイルとジョイドがもしこれからも続いくとすれば、結婚するわけにもいかず、ずっと日付は自分の死まで得られない。

でも今、日付を置くことができるなら、それが正確にふたりの関係が始まつた日ではなくとも、ひとつの中証になる。

「……それでウイルが満足するなら、俺はいいけど」

ややしばらく考えて、ジョイドは答えた。

「俺は別に日印なんかなくても、ウイルがそばにいるならそれでいいと思つてつけど。ウイルが欲しいってんなら、あつたほうがいいかもな」

「ありがとう」

ウイルの頬がゆるんだ。つられて、ジョイドも口の端を上げる。思わず手を握りたくなつたけれど、万が一のことを考えてやめた。今ふたりの声が届く範囲に人がいないことは見ればわかるけれど、ふたりが見える範囲がどこまでかはわからないのだ。校庭でたまたま余所見をした生徒が、この教室の窓を見ていいとは限らない。

そんな、人目を気にする関係だとしても。

日付はひとつの中印であり、証なのだと、ウイルは思つ。

\* \* \*

その夜、ふたりは別々に家を出て、学校の裏手のところに落ち合うことにした。

前の夜に日付屋の少女に会っていたのはウイルだけだから、ウイルではないと話が繋がらない。しかも、少女は他の日付屋の人があるともいないとも言わなかつたから、少女ではない日付屋が出てきたら困る。

先に到着したのはジョイドだった。

壁に寄りかかって、地面にしゃがみこむ。窓のないところだから、建物の中にはいる日付屋たちにもバレないだろう。

UILはまだ来ない。もう少し細かく、いつの時に家を出たらこのくらいの時に到着するというのがわかれればいいのだが、あいにくこの国にそういう仕組みはない。太陽がどのくらいまで昇っているかで、朝、昼、夕、そしてその間、などというだいたいの「時」の見当はつくが、夜になってしまえばまったくわからなくなるのだった。

なんでそんな仕組みがなんだろう、とジョイドは考えた。自分のような莫迦ならばともかく、峠を越えた向こうまでも支配して役場を置けるような国王や、その役人たちならば考えられるのではないかだろうか。

そんなことをつらつらと思っていた時だった。

こちらに向かってくる足音が聞こえてジョイドはまつと意識をそちらに向けた。

UILの足音ではない。すくなくとも、UILはあんなに歩幅が狭くはないはずだ。それに、音が軽いところを見ると、体重の軽い女性か子どものような気がする。UILはジョイドよりはやや背も低いとはいえ、十分に男の体型だし、これらのオヤジたちよりは大きい。

足音はすぐそばで止まり、同時に気配がよつよつと伝わってきた。子どもだ。ここにはまったく明かりがなくて、輪郭さえも見えないが、子どもにはまちがいない。

「……何？」

すこし待つてみたが、相手が何も言わないの、ジョイドは自分から話しかけた。

だが返事はない。

「俺に何か用？」

すこしイラッときて、トゲのある口調になる。

それでも相手はすぐには答えず、もう一度「何か用かよ」と言おうとした瞬間に、

「迎え」

という意味不明な答えが返ってきた。

細い女の声。気配の大きさとあわせて考えて、おそらく少女だろう。だが声の落ち着き具合と、声の降ってきた高さからして、ジョイドのもつとも苦手とする、学校に入るか入らないかくらいの大きさの子どもでないことはわずかに救いだつた。

「迎えって？俺を迎えてきたの？」

わかりにくいけが、頷いた気配がする。

「日付

さらに意味不明なことを少女は囁つ。

日付がどうした。

あ、もしかしてこの少女が、ウイルが昼間囁いていた日付屋の少女だろうか。

「もしやお前が日付屋つてわけ？」

得心して言うと、少女も頷く。

「そか、俺を迎えてきたんだな。ウイル 昨日お前に会つた男はもう着いてるのか？」

少女は首を振つた。

「でもお前、俺が今日来るやつだつてわかつたの？」

これには少女は答えなかつた。日付屋は日付がわかるくらいだから、特殊な能力があるのかもしね、とジョイドは思つ。

「じゃ、付いていきますよ日付屋サン」

ジョイドはズボンをはらつて立ち上がつた。

そこへちょうど、ぱたぱたと足音が近づいてくる。今度こそ、ウイルにまちがいない。

「ごめん、ぼくのほうが遅かつたね。 え、きみ、ジョイドがぼ

くの相方だつてわかつたの？」

ウイルも驚いているのを聞くと、ウイルが彼女に、ジョイドを迎

えに行くよつに頼んだわけではなかつたらしい。

少女はうつなづき、半回転して日付屋の方向に歩き始めた。ふたりもそれに続く。

「ね、彼女がぼくの浮氣相手じゃないこと、わかつたでしょ? ウィルが耳もとでそんなことを囁いたので、わき腹をつねつてやつた。

「彼女が聞いてたらどうすんだよ」

「大丈夫だよ」

ウィルの言つたとおり、彼女はまつたく振り返ることも、足を止めることもなかつた。

なんだか不思議な子だな、といつのが、ジョイドの初めて日付屋を見た感想だつた。

まるで人間じやないみたいだ、と一瞬思つたことは、すぐに頭の中で取り消した。どうせ子ビもとつのはぜんぶ、人間とは似て非なる生きものなのだ、ジョイドにどつては。

少女はウィルとジョイドを日付屋に案内した。

日付屋内部の暗さと、テーブルなどの配置はまったく昨日のままだったが、昨日彼女がもつて来たのよりも小ぶりのランタンが、当たり前のようにテーブルの端に置かれていた。

そして、テーブルの前にあつた椅子が、昨日は三つだったのに今日は二つになっている。どこへ行つたのだろう、と見回すと、すぐに壁際に追いやられているのを見つけられた。

日付屋は、来る客の人数を見て取つて椅子を用意するのだろうか？しかし、ウィルは「次の夜は一人で来るから」などとは言わなかつたはずだ。なぜ少女はわかつたのだろう？

ただ、それを少女に訊いても答えは返つてこないような気がして、ウィルは何も言わず、ジョイドの隣の椅子に腰を下ろした。

「えつと、今の前の夜はありがとう」

ウィルはまずそう述べて、軽く頭を下げた。

ジョイドが何のことだろうと見上げているから、「ランタン、貸してくれて」

と少女に言つふりをして主にジョイドのために付け足した。「今さらだけど、ぼくの名前はウィル。彼はジョイドという」

少女はこくんと頷いた。

「きみにも、名前はあるの？」

興味半分で訊いてみたら、少女はいつもよりもほんの少し目を大きくした。

「ダイア」

少女の答えは、相変わらず無表情の無抑揚だつたけれども、今までの受け答えよりもなにがしかの感情が感じられるのは氣のせいだらうか。

「ダイアちゃん。　あ、なんかそれもおかしいな。ダイアと呼んでもいい？」

少女　ダイアはふたたび頷いた。

「ダイア、今の前の夜に言っていたお礼なんだけど、なにか欲しいものは思いついた？」

ジェイドが「なんだそれ」という顔をしてウイルを見ている。「お礼に何かあげるよ、という約束をしたんだよ」とウイルは説明した。

ダイアは長いまづげを伏せて、考へている様子だ。ジェイドがその沈黙に飽きてきて、足を組み替えたところ、ダイアが目を上げた。

「ドーナ」

「「ドーナ？？」」

ウイルとジェイドは顔を見合せた。

ドーナとは人の名前だろうか。ドーナといつ友達の女の子に会いたいとか？でなければ、ウイルもジェイドも知らない場所の名前？それとも、そんなおもちゃがあつただろうか。

ダイアはもう一度考へてから、細くて白い指で輪を作つて見せた。「あー、ドーナツ！」

ジェイドが叫ぶ。

少女はすこしうれしそうにも見える表情で頷いた。

「ドーナツが食べたいの？ それくらいならお安い『公用』だよね」

「『安い』『公用』なんて今どきだれも言わないけどな」

ジェイドが茶々を入れて、ウイルが頭をはたく。「うるさいな、慣用句を使つただけじゃないか」「ウイルは頭の中がジジくさいからな」

ふたりのやり取りを、ダイアがじつと見ていふことに気がついて、ふたりは慌てて手を膝の上に戻す。

軽く咳払いして、ウイルは本題を切り出した。

「……えつと、今日ぼくらは日付を買ひに来たんだけど」

上着の内ポケットから、封筒を取り出す。もちろん入っているのは札束。日付は安いものではない。具体的にいくらするのかわからなかつたから、とりあえず今あるぶんだけの金を持ってきた。

ジョイドが「あ、俺も」と自分の内ポケットに手を突っ込むと、ダイアが口を開いたのは同時だつた。

「サラの月の一日」

一瞬、何のことだか、頭が理解しなかつた。

しばらく考えて、ようやく頭の中にダイアの言葉が染みていく。

「サラの月、いちにけ……」

流し込むように、もう一度自分で呟く。

今度はウィル自身の声が胸の中に流れていき、じわじわと胸の底に到達したところから、暖かくなるような気がした。

「……で、それでいくらなんだ?」

ウィルよりも感慨をいだかなかつたらしい、ジョイドがいち早くわれに返つて訊く。

ダイアは首を振つた。

「いいや、じやなくてよ。値段を訊いてんだよ」

不可解な答えに、子ども嫌いが発動したのか、イライラした口調

でジョイドはもう一度ダイアに迫る。

だが、もう一度ダイアは首を振つた。

「ドーナ」

「いや、ドーナツは買ってやるから。それは前の夜の、ウィルがする礼だろ? ジやなくて、今日の日付の値段だよ」

「……ドーナ」

ダイアはまた繰り返す。

その他にも何か言いたいことがあるのか、周りを見回して、説明に使えそうなものを探しているようだが、あいにく机と椅子と壁以外、何もない。

「お金じゃなく、ドーナツでいいってこと?」

ウィルが口を挟むと、ダイアはこくんと頷いた。

「そんなわけにはいかないよ、口付は高こんでしまつ?」

「……終わり」

ダリアは再び短い台詞を返した。

「終わりって何が?」「……」

「こんな押し問答は終わりといつ意味だらうか。それともダイアとの面会時間が終わりといつ意味だらうか。あるいは、いつしてふたりと会うのが終わり　なんてわけはないだらう、さつきドーナツの約束をしたばかりだ。

「じゃあ、今日の次の夜にまたドーナツを持って来るよ。それでいい?」

ダイアは頷く。

「帰ろう、ジョイド」

「だけどよ……」

「ダイアがいこいつて言つんだからいいんだよ、きっと。じゃあねダイア」

ドアの前でウイルが手を振ると、ダイアはおずおずと手をあげて、ぎこちない振り方で手を振り返した。それはよしやく言葉を喋れるようになつたくらいの小さな子どもが振るやり方に似ていて、やや滑稽で、可愛らしかった。

ウイルに促されて、ジョイドも大きな手を振る。

「またね」

ウイルが言つと、ダイアは意味を考えるように手を泳がせてから、彼女も小さな声で「またね」と繰り返した。

たとえ真っ暗な夜だとしても、帰り道は並んで歩かず、出来る限り別の道を通る。なぜならだれかに見られる可能性がないとも限ら

ないし、並べば無言といつわけにも行かず、話を聞かれたら余計に変なうわざが立つこともあるから。

ふたりでもうずいぶん前から決めていたことだったので、日付屋を出ですぐにウイルは何も言わずジェイドから離れようとしたが、ジェイドがその肩を掴んで呼び止めた。

「ちょっと訊きたいことがあるだけだ

口調ははつきりとしていたが、怒っているわけでもなさそうだったの、ウイルは少しほっとして、「何?」と振り向く。

「この時間なら学校の裏、だれもいないよな?」

ウイルは頷く。さつき待ち合わせした場所ならば、だれに見つかるということもないだろう。そもそも学校は夜間、見回りなどない。当直のじじいがいるにはいるが、日の入りと共に寝ぐるいとはウイルやジェイドの子ども時代からの周知の事実だった。

地面がぬれていなことを確認して、腰を下ろす。

「あのダイアって子のことなんだけどよ」

ジェイドが切り出し、ウイルは闇で見えないジェイドの方向に顔を向けた。

「あの子が日付屋なんだよな?」

「そうだよ

「……何なんだ?」

「どういう意味?」

「うまく説明できねえんだけどよ、……ホントに人間か、あれ?」初対面で得た印象を、失礼だと思ったから消そうとしたが、彼女と話すうちに余計にその印象は深くなつていった。ジェイドが子ども嫌いだから、というわけではないと思う。彼女は、ふつつの子どもとは違う。

「……人間だと、思うよ」

思つ、などという曖昧な表現を使うところとまでは、ウイルも疑つてゐるのだろうか。

「いや、人間なのはまちがいないけど。だって機械じゃないことは、

動きを見ればジョイドもわかるだろ？』

「まあな。魔法なんてのは童話か吟遊詩人の世界にしかねえし」

「そりだよね。だから、人間だけ……ふつつの女の子ではないよ

うな気は、ぼくもしていた』

「だろうな。だいたい、いくらなんでも学校には行ってそうな大きさのくせに、あんな短い言葉しか喋れないって変じゃねえか？」

「うん。でもそれは、日付屋だから学校に行つていらないんじゃない」と、ぼくは思ったんだけど』

「学校に行つてなくとも、言葉くらいい喋れるだろ」

「そうかな？ それに日付屋について、ジョイドもおばあさんとかオヤジだとか、そういう話を聞いたことがあるでしょう？ だけど今日行つてわかったと思つけど、あの奥に部屋があるのは見えても、そこにだれかがいる気配はしない

「なんだよ、あのダイアって子が変身してババアとかオヤジになつてるつて言つのか？」

「そつは言わないけど……、得体の知れない、といつのは事実かもしけない」

ウイルがため息をついた。

ジョイドとちがつてウイルは子ども好きだし、あまり仲のよくないやつのことでも心配してしまう、ジョイドには理解できぬいやしさを持つていてるから、あのダイアという少女のことも心配しているのだろうきっと。そういうやさしさに嫉妬する自分はガキなのだと、わかつてはしてもイライラしてしまつには面倒くさくなつて、ジョイドはダイアについて考へることをやめた。

「ま、とりあえず帰るぞ」

尻をはらつて立ち上ると、ウイルも慌ててそれに続ぐ。

学校を出て道を別れると同時に、パンツと一緒に手のひらを合わせた。

「次の夜は、ドーナツ持つて集合だからね」

「おう



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9671a/>

---

日付屋 あした、たいようのぼるあしたに  
2010年10月12日07時35分発行